

武蔵野日曜聖書講筈

神と天然

——マタイ伝第6章1〜13節——

1974年11月10日

小池辰雄

美しき天然 11月10日はシラーとルッターの誕生日 ルッターの「自由」、シラーの「遊び」使徒的信仰の奥義 隠れています神 日本の歴史の中にある真理を福音の目で見ると 神秘界は本場の現実

【マタイ6】

1 汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

2 さらば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。3 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。4 是はその施濟の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕きんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいたり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。7

また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思うなり。8 さらば彼らに倣うな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要なる物を知りたもう。9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。10 御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行われん事を。11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。13 我らを嘗試に遇せず、悪より救い出したまえ」

●美しき天然

……〔九州旅行（獨協高校修学旅行引率）の報告省略〕……

今日の題は「神と天然」としたけれども、マタイ伝6章の1節から18節がどうして「神と天然」になるか。ここを読んでいきますと、



「隠れたるに見給う汝の父」

と書いてある。だから、よほど「隠れたる父」とか、「隠れたる神」とかという題に今日はしようと思ったんです、正直。我々には、隠れて見えない。キリストにも隠れて見えなかった。ところが、キリストは、

「隠れたるに見給う」

とおっしゃる。そして、神さまは隠れて見給うのだが、この隠れて見給うところの神は、実は「神の衣」——これは「美しき天然」の歌が表わしているから、私は「神の衣」というので——神の衣、神の音楽、

「空にさえずる鳥の声

峯より落つる滝の音

大波小波とつとつと

響き絶やせぬ海の音

聞けや人々面白き

この天然の音楽を

調べ自在に弾きたもつ

神の御手おんての尊しや」

という、神のあの天然の歌は、私は大好きなんです、あの歌のように、たけしまはじろも武島羽衣（1872～1967）さんが作詞したように、神さまの姿はこの天然に現われているんです。天然のあらゆる千変万化しているところの姿は神さまの顕れである。ある時は嵐となり、あるときはそよ風となる。私たちにおいては春、夏、秋、冬、千変万化。

「まあなんと天然自然は素晴らしいなあ」

というけれども、これは神さまの創作ではないですか。神さまの創作であり、神さまは大芸術家である。

「神は最大の芸術家 (größte Künstler)」

と言ったのはシラーです。

●11月10日はシラーとルッターの誕生日

この11月10日は、今日がシラー [Johann Christoph Friedrich von Schiller 1759/11/10～1805/5/9] の誕生日です。マルティン・ルッター [Martin Luther 1483/11/10～1546/2/18] の誕生日でもある。

今日は午前の結婚披露宴で一席やってきたんです、シラーとルッターを引用して。また披露宴で伝道してしました。圧倒してしまつてね。そうしたら、

「先生の集会に行かしてもらいたい」

と、一人言い出した。そのうちに来るかも知れない。

とにかく、マルティン・ルッターとシラーは「自由」(フライハイト)を言った。シラーは「調和」(ハルモニ)と完全性(フォルコメンハイト)を言った。これは私の論文をちよつとお読みくだされば分りますけれども。自分で読み返して、

「よ〜〜これだけ書いたなあ」



なんて思ってしまった。私はあの時は相当勉強して、一夏勉強したんだからな。

調和と完全性を彼は究極のこととしてねらっていたわけです。その調和と完全性を天然が現しているわけです。天然自然は美である。美は調和を——矛盾を中にもっていますよ、矛盾を持つているけれども——大調和を持つている。完全性を持つているということは、神さまが大自然の芸術家である。

そして、神さまの最大の傑作は人間であつたが、この傑作物がすっかり神に反逆してしまつて、その自由が——人間に自由を与えた。他の天然は必然でもつて動いて、それが素晴らしいけれども——人間は、人格的存在が自由を与えられて、この自由が非常に恵みであると同時に、危ないものである。これはマルティン・ルッターが「クリスチャンの自由」を言ったときに、

「神に絶対依存しているが故に自由である。神の自由が来るから自由で、神に絶対依存しているから、奴隷意志である。奴隷意志であることが、本当は自由である」

と。己に死ぬことが——これはキリストがおっしゃっている通り——これはこの6章に出ているから、あの「主の祈り」に。

10 みくに 御国の来らんことを。 みこころ 御意の天のごとく地にも行われん事を。

御意の天になる如く地にも行われよと。御意は、神さまの御意は、神さまの意志は自由なものですね。

「この絶対自由な神の意志が天上におけるが如く、地上にも行われよ、地上の我々を通しても行われよ」

と。こういうことですよ。

この「我々を通して」というときに、神の意志を受けとるときに、人間が本当に絶対自由の質を持つのに、神の意志をそっちのけにして、手放しにして

「自由、自由」

と言っているのが今の現代の自由だから、これが行き詰まってしまった。これが自我、自我である。自我欲とからんで、これは勝手気儘きまづとなり、イデオロギーの主張となり、何のかんものというのは結局そこなんです。教育の問題も最後はそこなんだ。

だから、どう考えても、宗教と教育は、教育の土台に宗教がなければならぬことは——政治でも経済でもみんなそうです——奥にはどうしてもこの世界がなければならぬ。このことに目を本当にかけて、目を覚まさせるためには、第二の宗教改革を必要とする。

●ルッターの「自由」、シラーの「遊び」

私は農学校でも言ったんです。

「大体、農業の方がだんだん幅が狭くなって、人数が少なくなつて、学校も少なくなつて、農地も少なくなつて、日本は滅びてしまう。あなた方は本当に大事な使命、



重要な使命を担っている。君たちは土台となるような人々なんだから、そのことをしつかり自覚してくれ。日本は、もし農業がなくなったら、おしまいだ。君たちはそれだけ光栄あるところの職業を持っている。マルティン・ルッターも農夫（パウアー）の子であった。一人びとりが本当にこのことに目覚めてもらいたい。杉山校長さんは信仰のある方だから、しつかり学べ」というわけで、杉山君も言ったんだよ、

「なにかこの頃、生徒がどうも気力がない」

と。まああの学校に限らず。

「あんた、そんなこと言っちゃダメじゃないか」

と言って、私はもうあそこで熱弁をふるってしまった。今の若い人たちが、もう本当に信仰の事態がなかったら、何事も本当に始まらない。何か特殊なことだと思っているが、冗談じゃないというわけだ。

そういうことで、ルッターの自由、シラーの自由のことを言った。宗教とまた文学の方で、自由の選手が同じ月の同じ日に生まれている。

そのような完全性を、またシラーは面白い言葉で言っているわけです。

「無心に照らす太陽の光、無心に降る春雨、これは善人にも悪人にも一視同仁に与えられる陽光であり、慈雨である。

これは私の文章ですよ。

これが自然界の遊びの相である。

シラーは「遊び」（シュピール）ということをやった。

これを見て、キリストはこう言った、『天の父はその日を悪しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからざる者にも降らせなさる。だから、お前も

天の父の完全なように完全であれ』と」

完全（フォルコンメン）であれ、即ち善き悪しきなんていうそんな相対的な判断はするなと。相対的判断をするということは、自分が相対の中にいるということですよ。絶対の世界にいます、相対的なものを全部、絶対の中に取り入れるだけの力を持つんです。だから、相対のことは問題でなくなる。

「どつちでも構わない。善くても悪くてもいいよ」
ではない。

「善くても悪くてもそんなものは全部いい世界に入れてしまうぞ」

というんです。それでなければ、相対を超越するということは言えない。大きく包んでしまつて、それを変えてしまう。救い上げてしまうんです。救い上げる力がなかったら、相対の善悪をいい加減にしているのは、それこそいい加減だ。そうじゃない。その善悪のよくな区別は全部、善にしてしまう。光と闇は全部、光にしてしまう。電灯が光っていなか



つたら、ここは闇ですよ。光つたら、これがみんな光になってしまわないですか、この部屋の中が。そうでしょ。

「お前は闇だから」

といって、光がどこか一部分を闇にしていますか。そうじゃないでしょ。そのように、太陽の陽の下の民は、我々自身が聖霊の火の中に宿して、全部これを光に変えざるを得ない。どんな悲しみも何も全部、喜びに変えざるを得ない。というだけのものを神さまは聖霊において私たちに下さっているんだから。これを抜きにして何が信仰か、というんだ。だから、

「無教会はただ十字架十字架と言っているからダメだ、その先をなぜ進まないか」ということなんです。

「宗教的な遊びの心がこれである。相対的な善悪を超越して、善悪を包み、これを絶対的な善に救済する力を持っている。キリストは、「自分は何もできない」と言った。この無為の者が一切を為した。それは神の懐に遊ぶ全的な在り方であったから、無即無限となり、無限の神的な力がイエスの全存在から溢れてきたからである。これを私は無的実存という。そこで、かくてシラーは、実はその短命の未完成的生涯において、美の世界において、完成的心境に到達したのであった。彼の美学論は全体として有機的に驚くべき内容をもっている。彼の十字架もこの遊びにおいて極まったわけである。この遊びこそ即自然の姿である。」

自然の姿が本当にこの遊び。老子の言うところの無為の世界。「無為の為」という世界です。「いわゆる模倣（ナッハアームング）などではない。およそ真理は、即という消息においてのみ把握され、体现されるのである。現象即本体、美即真という消息。生きている姿（レーベンデ・ゲシュタルト）が即ち、真理（ヴァールハイト）なのである。イエスが「我を見しものは父を見しなり」と喝破されたのはこのことである。」

●使徒的信仰の奥義

杉山君が「色紙を書いてくれ」というから、僕はペテロのあの「我を見よ」と言ったところを書いた。

「我を見よ、我がうちなるものを汝に与う。我に金銀なし、イエス・キリストの名によりて歩め」

と。それから、

「お前たちはなぜ怪しむか、なぜ私を見るか。私の敬虔でも何でもない。イエス・キリストに神さまが栄光あらしめた」

という、あそこの二つの相矛盾したような言葉を並べて、

「これは信仰の、使徒的信仰の奥義だよ」

と言って、僕は渡した。杉山君はじつと見ていて、うなずいていました。



皆さん、他人^{ひと}ごとではないですよ。あなた方一人ひとり、それができなくては。必ずできるんです。

「私はまだです」

なんて、いつまでも「まだです」なんか言う必要はないんです、ひとつも。遊びの世界。遊びというのは委ねの世界なんです。委ねです。だから、子供の^{こども}ごとく、

「幼児^{おさなご}の如くあれ」

と、キリストが言われたのはそのことです。その幼児^{おさなご}の姿において本当に真なるものが動いている。だから、幼稚園や保育園で小さい子を見ていると、こつちが教わるわけだ。彼らには何か知らんけれども、つくりがない。それが「遊び」です、「ゆだね」なんです。

そういうことで、今日はちょうど、シラーとルッターの日だもんですから、話はそういうことにもなりましたが。

●隠れています神

6章の「主の祈り」のことは、詳しく私が書いたものがありますから、それを読んでいただければ結構ですが〔註：『聖意体現』―実存の源なる「主の祈り」―として本文庫に収録。〕『聖霊の翼の陰に』の改題再販、1959年12月20日発行）。要するに、キリストはここではもちろん、

「隠れたるにいますところの汝らの父に祈れ」

と。「隠れた」ということは、神秘（ミステイク）ということ。神秘界にいたるところのということ。という事です。

「神秘界にいらつしやるところの神さまはちゃんと聞いていらつしやる」

と。「隠されたる神」という言葉がイザヤ書にもありますけれども。ところが、隠れたる神が大自然^{あたら}に露わであると同時に、一番露わに現われたのが、いうまでもなく、ナザレのイエス・キリストにおいて現われた。イエス・キリストにおいて現われたんだが、現われたことによつて、人々は躓いたね。現われながら、隠されているわけだ。困ったもんだね、これ。だから、十字架にかけられてしまった。

ユダヤ人がそれに躓いた。ギリシヤ人も躓いた。ユダヤ人もギリシヤ人も人々は全部、キリストに躓いた。何となれば、本当に自分を神の中に委ねることが、人間はできない。無私^{むし}な実存^{じつぞん}になれない。無私になれないから。

そういう、「あそび」「ゆだね」の事態です。

「大道すたれて仁義あり」

という。老子は素晴らしいことを言ったね。「大道」、大いなる道というのは、下らない詮索をしない道だと。それが廃れたもんだから、仁だとか義だとか言っている。素晴らしい言葉だね、普通は仁だの義だのというのは、最も高次の言葉ですよ。「仁と義」という言葉は、「愛と義」だよ、キリスト教の二つのあれだもの。ところが、「大道すたれて仁義あり」なん



だ。

「大道が廃れたものだから、仁だの義だのと言って、一生懸命にやかましく言っているけれども」

なんていうわけでしょ。大きな野郎だね、この老子というやつは。即ち、「大道」とは、イエス・キリストではないですか。

「我は道なり」

という。この大道はイエス・キリスト。イエス・キリストは神の中に遊んでいた人だ。遊びの人です——「遊びの人」なんていうとおかしいけれども——本当に自分を委ねきつた人ですね。だから、彼はもう天衣無縫でしょ。あれが大道なんですよ。すること為すこと言うことが。そこに自ずから仁も義も含まれているんです、はつきりと。

これが廃れたというのは、誰もこれができないものだから、

「さあ義だ、仁だ」

と言って、

「義だ、愛だ」

と言って、これまたキリスト教でもやかましく言っている。そんなことをやかましく言ったってダメだ。

「義である、キリストであるところの大道に帰れ」

ということですが、道なるキリストに。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

という。

「キリストに帰れ。そうしたら、仁も義も自ずから出てくるぞ」

と、こういうわけだよな。

それがこの「隠れています神」「神秘の神」です。詩篇の19篇にある通り。

「²この日ことばをかの日につたえこのよ知識をかの夜におくる。語らずいわ

ずその声きこえざるに⁴そのひびきは全地にあまねくそのことばは地のはて

にまでおよぶ」(詩篇19・2～4)

とあるじゃないですか。

「語らず言わず、また見えざるに、その姿は全地にあまねし」

というわけだ。大自然にも現われている。

私は実はこの6章の19節から7章の終りまでを3回にわたって京都でお話します〔註：「京都秋季特別集会（11月16～17日）、①「本日一生」、②「唯一のもの」、③「聖意体現」〕。今日はその序論なんです。



●日本の歴史の中にある真理を福音の目で見る

「野の百合を見よ」

というわけですね。「この菊の花を見よ」というわけだ。神さまは芸術家だから。路傍の石でもいい。……〔飛騨高山の鍾乳洞見学の話、省略〕……

石の美しさ、天然というのは何と素晴らしいかと。これは人工の美なんかとてもかなわん。天然の美を本当につかまえて、あの飛騨の匠たくみなんてのは、釘一本も使わないでやったんでしょ。「合掌造り」というのを私は見てきたけれども。とにかく、日本人は本来いい素質を、自然と溶け合うものを持つていた。もう一辺、帰らなくてはいかんですよ、本当に。

今は、世の中の風潮がもう実に乱れておかしなことになっているから、よほどしつかりしないと、ダメですよ。そして、本当にあなた方一人ひとり第二の宗教改革者のつもりでやらなくては。それを、

「日曜はくたびれた」

なんて言つて、来なかつたりしたら、しょうがないじゃないですか。まあ別に誰かのことを言っているわけじゃないけれども（笑）。来れば力が出るんだよね。私だつて疲れることもあるさ。けれども、皆さんと集会をやつていけば、上から力が来てしまう。

「どうして、あなたはそんなに元気なんですか？」

と、校長さんたちも少しびつくりしているんだよね。それで、

「私は水泳をやっています」

「ああ、そうですか。水泳のおかげですね」

なんて。その先の神秘の世界のことは言わないんだ（笑）。水泳で元気なことになっていきますが。

「あれはいい運動ですよ。この頃はスキーは危ないからやりませんけれども」

なんて言つて。もつと本当のことを言つた方がいいんですけれどもね。まあそういうわけです。

また、日本人は日本を見直して、歴史の中にある真理を福音の目で見れば、全部新しく発見できる。聖霊の光というものは凄いもんですから。

だから、今日なんか結婚披露宴に行つたつて、話してやつて何とかもう少しあの若い連中に魂を入れ換えてやりたいと思うんだよね。けれども、あまり時間をとつては悪いから、適当にしましたけれども、一席やりたかつた。そうしたら、同じテーブルの女の子が、

「もつとお聞きしたかつたです……」

なんて言つていたけれども。

●神秘界は本当の現実

6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて隠れたるに在す汝の父に



「祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。
と。いいですか、

「神秘界に自分を入れよ。神秘界は本当の現実である。魂の本当の現実の世界に自分を入れて、神の生命にあずかれ、神の言に聞き入れ」

と、こういうことです。そうしたらば、主の祈りなんていうのは、グツときてしまう。

神は天然に現われ、キリストに最も素晴らしく現われ、私たち一人びとりに現われ給う。この隠れたる神は天然に現われ、キリストに現われ、私たち一人びとりに現われ給う。神を現すことが証あかしなんです。その意味において、大自然の姿において、神の意こころを知るということは、非常に大事なことです。自然のたくみのないことですね。私たちも、その巧みなきところの巧みさ、巧みなき絶妙さ、それは神の中に本当に入るときに、これが現われてくる。

どうぞ、そういうことで、皆さん一人びとりが本当の証人あかしびとになつてください。そこに本当の自由があるんだ。天的必然が自由なんです。天然という言葉が、私は好きなんだ。讚美歌の代わりに、今日は「空にさえずる鳥の声」「美しき天然」を歌おうかな。あれは讚美歌みたいなものです、正直。では終わります。

